

シリーズ 地域の達人 -今西勝氏-

日本一の里山を支える。

生

愛媛や福島の炭の方が、見た目は綺麗。
でも、池田炭の良さは、つこうてもらったら分かる。

今西勝

Masaru IMANISHI



写真右／炭焼き釜の様子
写真左／今西さん

川西市在住、70歳。

里山の中でも日本一と言われる川西市黒川で、50年以上炭焼きをしている。



兵庫県川西市黒川は、池田炭を産出し、伝統的な里山管理の実績を上げている地域です。この地域は里山の景観を維持しており、生きている遺産とも言えます。ここで日本一の里山を支え、炭焼きをしている今西氏にお話を伺いました。以下、今西氏談。

1. 日本一の里山と炭焼き

私自身は、53年間、炭焼きをしています。別にここに限らず、昔はどこかの村に行っても、薪と炭がなかったら、他に燃料がなかったんです。だから、炭焼きをやったんです。私が炭焼きをしている黒川は、日本一の里山と言われています。山を毎年少しずつモザイク状に切っていくと、10年くらいで山全体の木を切るようになります。見た目はパッチワークみたいな感じ。炭焼きの木を切る周期は、山を更新するのと同じ周期で、生きた里山になっているんです。山も人間と同じで放つといたら代謝が悪くなるし、里山がないと炭焼きは出来ない。みんな今はもう炭を焼かないし、ちょっと椎茸をやっているくらいです。そこが服部先生（人と自然の博物館研究部長）のおっしゃる、山が荒れている状態なのです。木を切らない方が、森林破壊してるようなものなんです。

2. 池田炭の魅力

川西で焼いている炭を、大阪府池田市の市場で販売されていることから「池田炭」と言ったり、川西市一庫で生産していることから「一庫炭」と言ったりもします。また、炭の切り口に菊の花びらのような割れ目があるんで、その見た目から「菊炭」とも言います。見た目が美しいだけでなく、長くいって、お茶の湯を沸かす炭として使う方が、この炭を求められます。お茶の世界で全部の人が使うわけではないが、湯さえ沸けば良いという人もいます。だが、千利休さんも炭をいこして

湯を沸かした。豊臣秀吉がお茶会をやったときに、池田炭を褒めた記録も残っています。炭を組む手前、炭手前と言うのが、そういうのもお茶の作法です。ただ、お茶を飲むだけやない、炭を長く切り、火をいこして使うというようなこと、のこぎりで炭を切ることも、お茶の世界では勉強なのだといひます。今は、煙がたくさん出るのを炭やと思ってる。炭といふとこんなものかと思ってるから、うちの炭を使ってバーベキューをしたら全然違うから。

3. 炭焼きの仕事について

池田炭は、くぬぎの木を焼きます。1回に4〜4.5tの原木を焼き800キロの炭が出来ます。釜の内部は100度くらいの温度なんです。サウナと同じかそれより少し高いくらいの温度の中に入ります。良い池田炭をつくるためには、木から炭になるのだから、よい木を作ること。よい山を探すこと。今は誰も山の手入れをしてくれないので、手入れをしないと。

家族のチームワークというほどでもないが、炭を出すときだけは全員で手伝ってもらわないと、できる作業ではありません。そこで原則的に家族ともう1人手伝いに来てもらっています。息子も専業で炭焼きをしているので、今後、私の跡を継いでいくとは思いますが、息子1人では出来ません。一緒にやっていく仲間がおりんと。

4. 炭焼きの仕事をしていて

大変だなと思うのは温度が100度の釜の中に入るとき。他にも、つらいことはたくさんあります。未明の2時3時に起きて火を止めに行かないといけないときもあります。そこで止めないと炭が悪くなっていく。昔は車もなく、車があっても山の上の方まで行けなかった。歩いて提灯をともし2時でも3時でも雪が降っていても行ったものです。一番良かったと思うことは、初めて買ってくれた方から必ずお礼の手紙が来ます。「いい炭を送っていただいて、大事に使わせていただいています。」というようなね。それは嬉しいことです。

5. 最後に

炭焼きを続けていて、おもしろいことないですねえ。それでも、炭を送っていただいてありがとうという言葉、これはなかなか言っていないものではないですよ。川西市内の小学生がここに見学に来て、炭を1片100円で売っているのを見て、感想文に、「おじさん100円で売んな、少なくとも400円や500円で売れ。僕なら、その値段でも買う。」と書いたそうです。それは、うちの炭に感動して惚れ込んだんやと思うと、すごく嬉しいですね。この炭焼きを通じての出会いを私は大事にしています。取材もそう。うちの炭が必要なら、いつでも早めに言うてください。よっぽどの量やない限り、持って行きますよ。（笑）

注) いこす
炭を赤い熱をもった状態に
すること。



写真左／見た目に美しい菊炭



写真右／里山の景観

物多様性

ひょうごの里山

08年4月26日にひとはくホロンピアホールで環境省とひとはくが共催するシンポジウムが開かれ、400人を超える参加者があって賑わった。G8環境大臣会合開催記念シンポジウム「アジアからの発信 人と自然の共生のみちをさぐる」と題し、“SATOYAMA from Asia”を標榜したものだった。第3次生物多様性国家戦略で、4つの基本戦略のひとつ、「地球規模の視野をもって行動する」の例示にSATOYAMAイニシアティブが提唱されている。この行動は、アジアを通じて世界に発信すべきものと理解されるが、G8環境大臣会合が神戸で開かれる機会に、アジア諸国の環境大臣も招聘し、さらに5月にボンで開かれる生物多様性条約加盟国会議COP9の環境大臣会合にも提起し、8月の洞爺湖サミットに向けての取り組みの基盤をつくることを目指したのが今回のシンポジウムだった。

このシンポジウムがひとはくと共催で、ホロンピアホールで開催されたのにはそれなりの背景がある。兵庫県は里山のもつ諸問題の縮図であるともいえ、それに対応する点でも先進県である。最近では、里山といえば、都市近傍でボランティア活動によって維持されているところが話題を賑わわすが、もちろん兵庫県にもそのような例には事欠かない。一方、中山間地域などの里山は放棄された状態が続き、荒廃は目を覆うほどであるが、全国的には手を打たれる例が乏しい。兵庫県ではみどり税を投入した豊かな森づくりが実際にいくつかの地点で試行的な事業を遂行している。行政指導で何ができるか、壮大な実験が始まっているといえる。さらに、川西市黒川で、池田炭を産出している地域（本号インタビュー参照）は、日常的な手入れをボランティア活動に助けられながら、伝統的な里山管理の実

績を上げている。里山の景観を見事に維持しており、生きている遺産ともいえるところである。この地域は環境の里地里山事業のモデル地区ともなった。

このような背景を踏まえ、さらにG8環境大臣会合が神戸で開かれるという時期でもあったので、このシンポジウムの共催相手にひとはくが選ばれたのは妥当な選択だった。実際、会合は、26日のシンポジウム、27日午前のワークショップ、午後のイクスカーションと、順調に、しかも稔り豊かに進められた。シンポジウムでは、国連大学高等研のカンパー博士とひとはくの服部保教授の基調講演があり、事例報告には、インド、インドネシア、韓国その他、日本からは千葉、滋賀と兵庫の場合が例示された。内容については『国立公園』7月号に速報され、報告書も準備されるはずである。それよりも、G8に向けて、実際の活動が構築されるようで、成果が稔るのも迅速である。

里山の荒廃は1960年代からのエネルギー革命による薪炭離れに促される。昨年中に、日本列島で熊が5000頭も殺されるという異常な事態が見られたが、これも里山の荒廃と無関係ではない。里山は放棄すればやがて自然のすがたに戻るといえる人がいるが、たとえ戻にしても、それは数十年から百年単位の時間をかけてのことである。今生きている日本人はすべて、荒廃した里山といっしょに生きることになる。今、自分たちの日本列島に生きるためには、荒廃しつつある里山と上手につきあうことは不可避である。

里山に見られる多様な現実と直面し、それと対応する行動をつくりあげたいものである。

(岩槻邦男：館長)



写真上／400名を超える聴衆
写真下／黒川の里山を見学するゲスト達

この秋は、家族みんなで ひとはくフェアブル大作戦！

2008. 9. 20(土)～11. 30(日)

『昆虫記』刊行100年記念日共同企画 「フェアブルにまなぶ」展

同時開催：兵庫地域展 「兵庫のナチュラリストたちと昆虫不思議ラボ」



兵庫地域展 「兵庫のナチュラリストたちと昆虫不思議ラボ」

■ひとはくフェアブル大作戦

この秋、ひとはくでは巡回展「フェアブルにまなぶ」展が開催されます。それにあわせて地域展示として、虫や自然を愛した兵庫ゆかりのナチュラリストを紹介する「兵庫の偉大なナチュラリストたち」、昆虫の不思議を親子で体感できる「昆虫不思議ラボ」、県民のみなさんや児童・生徒たちのじっくり観察・発見を紹介する「ひょうごのフェアブル・未来のフェアブル」、イベントに参加してフェアブルポイントをゲットできる「フェアブル大作園パスポート」など、楽しい展示・イベント満載でみなさんをフェアブルの世界へいざないます。

巡回展・地域展あわせて展示品は6,000点以上、会期中のセミナー・イベント類は100回以上にのぼります。巡回展の展示はこの秋のひとはくが国内最後で、これほど大掛かりな「フェアブル展」はもう日本では開催できないかもしれせん。秋はフェアブル大作戦。お見逃しなく。

■開催中の観覧料

大人600円、高校生・大学生450円、小学生・中学生300円
(幼児と県内小中学生はココロカードで無料。)

となります。20名以上の団体は割引があります。

ひとはく「フェアブルにまなぶ」展の詳細は、ホームページからご覧いただけます。

<http://hitohaku.jp/daisakusen>

(橋本佳明：自然・環境評価研究部)



黄虫やオオクジャクガなど「昆虫記」に描かれたフェアブルの観察の様子を飛び出す絵本風に紹介。また、フェアブルが暮らした雨仏の色々な昆虫標本もたくさん展示しています。



フェアブル自身が採集した昆虫、植物化石標本や昆虫記でつかった観察装置、手書き原稿やダーウィンと交わした書簡などの日本初公開の品々も展示しています。



昆虫不思議ラボでは、自由にふれて、動かしたり、聞いたり、嗅いだりできる展示で、フェアブルのように昆虫の不思議発見に挑戦してみてください。



会期中は、ひとはくでフェアブル紙芝居や講談のよみおし、虫や植物の観察の演習プログラムなど、特別なイベントもたくさん開催します。